透析施設最前線 Vol.3

HOSPYグループ 金山クリニック

金山クリニック

所在地 ： 名古屋市熱田区沢上2-2-14
透析台数： 80台
看護師数： 35名（透析療法指導看護師8名）
患者数 ： 222名

■ HOSPYグループのサテライト施設として通院透析患者さんを支援

金山クリニックは、HOSPYグループの透析サテライト施設として1979年に開設され、2002年に現在の場所にリニューアルオープンした。約30年にわたる実績をもとに、地域社会に貢献できる施設を目標として、透析患者さんの社会復帰を積極的に支援している。現在、非常勤スタッフを含めて約70名の職員が勤務し、月・水・金と火・木・土の朝・ナカ・夜の6シフト体制で通院患者さんの透析を行っている。患者さんの約50%は65歳以上の高齢者で、透析歴30年以上の方は10名通院中だという。

■ 学習会を通じてより深みのある教育を

金山クリニックに勤務する看護師は現在35名だが、透析看護の経験年数は1年未満～30年以上と幅広い。同施設では、経験の浅い看護師に対して知識や技術面に留まらず、より深みのある教育を行うために、患者さんから透析生活での体験談を語っていただく「長期透析患者さんから学ぶ」学習会や、リスク感性を高める体験学習などを行っている。

江崎眞知子看護師長

江崎看護師長は、「学習会では長期透析患者さんの生の声を聞き、今後の透析看護に生かすとともに、患者さんとのかかわり方について、新人もベテランもいっしょに学ぶ機会として活用しています。また、体験学習ではリスクを察知する能力と、トラブルへの対処法の更なる習得を期待しています」と、こうした学習の目標について語った。

■ 透析患者さんを理解するためのコミュニケーションスキルの重要性

透析患者さんは身体的･心理的･社会的ストレスを抱えているケースが多く、そのストレスを看護師にぶつけることも少なくない。新人看護師のなかには、患者さんの言葉に傷つき、看護を続けていく自信を失ってしまう方もいる。山内看護主任は「新人看護師からは患者さんとのかかわり方で悩んでいるという声を聞くことも少なくありませんでした。離職防止のためにも、なぜ透析患者さんとのかかわりを苦手と感じるのかを聞き出し、コミュニケーションスキルを身につけることから学習を始めました」と、「長期透析患者さんから学ぶ」学習会の前身となったコミュニケーション学習会を始めたきっかけを語った。

山内要看護主任

コミュニケーションは言葉のキャッチボールともいわれており、学習会では上手な聴き方、話し方についてグループで学び、患者さんの気持ちを理解するために、透析患者さんの手記※を読む抄読会を開くこともあったという。こうした段階を経て、実際に長期透析患者さんを招いての学習会が企画された。(※「夜の透析室から」 著者:呉那加文)

■ 透析室では聞けないリアルな話も

「長期透析患者さんから学ぶ」学習会にお越しいただく患者さんの選択にあたっては、普段から看護師とのコミュニケーションが良好で、教師を勤められた方など人前で話すことが苦手ではない患者さんに依頼しているという。第1回の学習会では、長期透析患者さん1名を招いて、これまでの透析生活での体験談を語っていただき、その患者さんの奥様も交えて参加者全員でディスカッションを行った。第2回はさらに活発なディスカッションを期待して、3名の長期透析患者さんを招いて、3つのグループに分かれて、透析治療に対する思い、自己管理のポイント、医療者側に求めることなどについて、自由に意見交換を行った。

長期透析患者さんよりセルフケアを学ぶ

また、学習会に招く患者さんの手記を事前に配布し、それに対する感想や質問などをスタッフから集めたり、学習会に参加したスタッフの感想をまとめて、招いた患者さんに渡したりして、対話が深まるように工夫しているという。

■ 参加スタッフの意識に大きな変化が

患者さんを招いての学習会では、透析室における看護では聞くことのできなかった患者さんの本音や苦労話などを聞くことができ、参加したスタッフの意識にも変化があらわれてきた。透析看護を始めて4年になるという田中看護師は、「患者さんの人生観や体験談などに接する機会が増え、以前よりも患者さんを身近な存在として感じられるようになりましたし、透析を受けている時間だけでなく、家庭でのセルフケアなどにも、看護師として積極的にかかわっていくべきだと感じました」と自身の変化について語った。また、伊井看護主任は「私は透析看護に携わって15年になりますが、経験を積んでも本当は聞きたいけれど、触れてはいけないのではと思って聞けないことがたくさんあります。しかし、学習会での患者さんの語りによって、患者さんの思いを聴けたため、患者さんの見方、声のかけ方など、以前よりも大きく変化したと思います。こうした学習会を通じて、経験の短いスタッフに患者さんの辛さなどを共感してもらえたら嬉しいです」と、学習会の意義について語った。

田中希看護師主査

伊井たか子看護主任

このほか、患者さんをより深く理解するために、入職して半年～2年未満の看護師を対象に、透析患者さんと一緒に透析室ベッドで4時間横になって過ごす「透析疑似体験」も実施しており、体験した看護師からは「4時間も横になり透析を受ける患者さんの苦痛の一部を味わうことができた」、「透析中の患者さんにもっと積極的に声をかけていこうと思った」、「患者さんにかける「お疲れ様でした」の一言すら、以前とは違う言い方になった」といった感想が寄せられており、患者さんとのかかわり方にも変化が期待される。

■ 安全対策教育の一環としてリスク感性を高める体験学習を実施

金山クリニックでは安全対策委員会、防災委員会、教育委員会などの委員会活動も盛んで、患者さんが安全に、かつ安心して透析治療が受けられるように、スタッフの透析知識の習得・育成に力を入れている。

久保田万知子看護主任

同施設は透析看護経験3年未満の看護師が半数を占めており、透析中に起こりうる事故に対する判断力、透析医療安全に関する知識や認識を高めるために、さまざまな体験学習を行っている。昨年実施された脱血と空気混入に関する危険予知トレーニング(KYT)では、事故を未然に防ぐためのリスク感性を磨くことができたという。体験学習の企画担当者の1人である久保田看護主任は、「実際に事故を起こすことはできないので、脱血・空気混入を想定したシミュレーションを行い、空気を抜く方法を参加者一人ひとりに体験してもらいました。事故の恐ろしさを実感するとともに、日常業務での確認の重要性とポイントを再認識してもらえたのではないでしょうか」と語った。また、透析看護歴が約1年半という 春田看護師は、「脱血や空気混入については知識として頭では分かっていましたが、シミュレーションでその怖さを実感しました。対処法を身につけることも大切ですが、こうした事故を起こさないことの重要性が理解でき、事故に対する意識が変わりました」と、

体験学習の意義について述べた。

体験学習の前に脱血・空気混入に関する知識の確認テストを実施し、知識の曖昧な部分を明確にしてから体験学習を行うことで、間違った認識を払拭することができ、事後テストでは正解率がアップしているという。

春田陽子看護師

■ 透析看護のさらなる向上をめざして

金山クリニックは外来専門の透析施設であり、透析患者さんは週に3回通院しているが、一人ひとりの患者さんにセルフケアなどの指導を行う時間の確保は難しい。こうした問題を解決するために、患者会などの集まりで患者さんやそのご家族に対し、シャントの管理など、家庭での管理について指導しているほか、セルフケアについて患者さん同士が意見交換できる学習会の開催も検討中である。

また現在、高齢透析患者さんの「生きがい観」に関するアンケート調査も行っている。江崎看護師長は「透析患者さんは一生透析を続けなくてはなりませんが、看護師のかかわり方によって、「生きがい観」も変わってくる可能性があると思っています。患者さんの「生きがい観」を高めることは、これからの透析看護のポイントの1つになると考えています」と今後の抱負について語った。